4 日目の朝、青森のホテルを出発し、恐山に向かいました。友人は「下北半島でもう一泊しても良いわネ」と言うことでしたので、余裕が出来て、私の頭に浮かんだのは下の地図でした。

まず、恐山に直行し、マサカリの刃に沿って、南西に下り、脇野沢から仏ケ浦へ。大間を目指して北上し、大間原発内の「あさこはうす」に、そして、本州最北の鄙びた下風呂温泉に一泊。次の日、尻屋岬まで登り、六ケ所村へと下るコースです。下北半島一周ですが、距離、所要時間など、予想もつきませんでした。

下北半島には 3.11 以降、稼動中断中の**東通原発**、失敗続きで運転不能な**ウラン再処理再生工場**を含む六ケ所村**原子燃料サイクル施設**、建設も中断中の**大間原発**があり、原発銀座といってもいいでしょう。稼働していないから、放射能は少ないとはいえ、友人は不安な気持ちが拭えなかったようです。

マサカリの柄を北上する道は緑一色の原生林でした。時々陸奥湾が見えましたが、ほぼ、山の中を走ります。北海道の原生林を規模縮小、和風テイストにしたような原生林で、自然そのもの。雨が降ったり止んだりの中を走り、恐山には 11 時頃到着しました。

恐山はイタコ(死者の口寄せ)とセットで記憶され、名前自体、恐ろしいのですが、その名の山はなく、カルデラ湖の宇曾利湖を囲む、外輪山の中に、いまだに火山ガスの噴出する岩肌の上に、1200 年ほど前に開かれた天台宗の霊場のことです。

到着したら雨も止み、秋の大祭後の静けさの中にひっそりと、けれども堂々と佇んでいました。硫黄の臭いが漂う長い参道が私たちを迎えてくれました。本尊が円空による地蔵菩薩とのことですが、奥に金ぴかの袈裟をまとい、鎮座していました。大きな宿坊がありますから、大勢の人々が修行に来るようです。

本堂のすぐ横から石地となり、ところどころ蒸気が吹きあがっています。見るからに荒涼とした雰囲気で、これを地獄、賽の河原と見立てるのでしょう。けれどもその先に静かに美しい宇曾利湖が山並みを背景に広がっているのです。コントラストの絶妙さが恐山の魅力でしょう。苦しみの地獄から静けさの極楽へ、を思わせる光景でしょうか。本尊が地蔵菩薩ですから水子供養の小塔があちこちにあり、風車がくるくる回っていました。

物言わず死んだ吾子を思い、愛する人を偲び、死者の霊にここで会いたいと願うのでしょうか。イタコにそれを期待する人がいるのですね。恐山とイタコは直接関係はなく、ただイタコに出店を許しているとのことでした。イタコはどのようなトランス状態で口寄せするのかしら、実際に見てみたいものです。一種の心理的カウンセリングでしょうか。

ウイキペデイアで見ると、宇曾利はアイヌ語の「うしょろ／窪地」の音と意味を指し、その一帯を古くは「ウソリヤマ」と呼び、それが下北半島の訛りで、「オソレヤマ、オソレザン」となったとあります。アイヌが日本人より先にここにいたということでしょう。